
保健室の魔女

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保健室の魔女

【Nコード】

N5136A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

優しく迎え入れて、冷たく突き放す。そんな保健室の魔女の話。

窓の外を叩くような雨が降る。雨で始まる歌はなぜか悲しくて、雨で思い出すのはいつも保健室の白いベッドだ。

今日は保健室に行こう。ふと思いついて、おかしさが込みあげた。もう保健室なんてないのだ。

社会人になった今、暖かい保健室なんて幻想でしかない。

私は健子だった。怠い、熱っぽいと理由をつけて保健室に入り浸っていた。

体温計が平熱のサインを出した時。

「一時間だよ」

といってくれた先生のことを思い出す。

彼女は保健室の魔女。

憂鬱が雨と一緒にやってくる。

「だから女は…」

堂島課長の嫌味が聞こえてきそうだ。

理由をつけるのは簡単で、休む口実ぐらい思いつくのは容易い。

優しく迎え入れて、冷たく突き放す。そんな保健室が今もあればいいのと思う。

魔女は優しくなかった。三角に近い眼鏡は冷たくて、第一印象は恐かった。

治療が終わればさっさと追い出すし…。

気が付けばでも、足は保健室に向かった。一時間休めば追い出されて、なぜか頑張ってもいいとさえ思えた。

レインブルー

傘をくれたのは

雨の嫌いな

魔女

涙の跡が消えるまで

そっと優しく包んであげる

涙の跡が渴いたら

強く背中を押してあげる

保健室にあった詩集の中にそんな詩を見つけた。

何度も読まれてボロボロになった詩集。

魔女は本当は私たちと同じように、弱い人間の一人なのだと思う。

一時間くらいベッドで休んだ私は、化粧もせずに車のキーをポケットに入れた。

遅刻は確実。

「だから女は…」

堂島課長の台詞をつぶやいて、車を会社へと走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5136a/>

保健室の魔女

2010年10月10日07時50分発行